入選

大切に使おう、限りある水

水戸市立第四中学校
一年　小西凜花

私達の生活に欠かせない水。じゃ口からいつでも出る水を当たり前だと思っている。私自身、水がない生活を経験した記憶がないからだ。しかし今回、この作文をかくにあたり、母と水について話をした。そこでいろいろと感じたことを書こうと思う。

まず、水は私達の生活の上で飲み水として大切な物だ。水を口にしない日はない。また飲み水としてだけではなく、洗たくやそうじなど、私達の生活の中でたくさん使用されている。では、この水がなくなったらどうだろう。母は、東日本大震災の時の事を話してくれた。私は当時まだ二さい。全く記憶にない。あの日、母は夜勤から帰って自宅にいて、私と兄、姉の三人は保育園にいた。母は大きな地震にあわてて外に出たという。その時、母はすぐに家の中にもどり、おふろの水を満たんにし、なべやペットボトルに水をためたそうだ。理由を聞くと、停電をし、水も電気も使えなくなると思ったからだという。その後、母は私達三人を急いでむかえに来て、スーパーに寄り、すぐに食べられそうなパンやおかし、そして飲み物を買い家にもどった。母はこの時水のありがたさを感じ水に対しての考えが変わったという。当たり前だったことが、当たり前でなくなる。その不自由さを感じ、今まで以上に節水を意識するようになったという。洗い物の間、水を出しっぱなしにしない。ちょっとしたことかもしれないが、家族五人が日々意識すれば、大きな節水につながる。そう思った。

また、母はつい最近の出来事として、なか川はんらんについて話してくれた。二〇一九年十月、台風によりたくさんの雨が降り、川の水が人々の住む街にあふれ出した。茶色くにごった水。テレビでその映像を見てびっくりした。私も父や母の車で通ったことのある道。しかし、テレビに映っているものは、

私の知っている風景とは違った。この時、茶色くにごった水に恐怖を感じた。私達の生活に欠かせない水が、街をおおい、あらゆる物やそして人々までをおし流す。でも、何もすることが出来ない。次々と大量の水が流れこんでくる。こんなことが起こるんだと怖くなった。今、私のこのいる場所で同じ事が起こったら、私はどうするのだろう。にげられるのだろうか。自信がない。そのため、日ごろから災害時に自分はどう行動したらよいのか考え、家族とも話し合いをしておく必要があると思った。自然が起こす災害は、突然私達の前で起こる。これまでの災害について調べ、自分なりにどう行動するべきか、考えていこうと思う。

また、今回、母と水について話をし、私達は日ごろ、水に困ることはほとんどないが、世界の中には、水が不足している所がたくさんあると知った。私達のように、きれいですきとおった水ではなく、飲み物も十分になく、洗たくも川の水を使う。また、水や食べ物が十分になく、栄養不足となり、時には命を落としてしまう子供もいる。同じ時に生まれているのに、あまりにも生活が異なり、とても悲しくなった。だから、私も水を大切に使おうと思うようになった。水不足で困っている人達もたくさんいる。水があることを当たり前に思わず、出しっぱなしにしたりせず、水分をとる時も大切に飲みたいと思う。私が今できることは小さな事かもしれないけど、私と同じようにみんなが少しでも気にかけて過ごすようになったら、大きな変化になるかもしれない。だから、家族や友達に声をかけていきたいと思う。